令和５年度　国立夜須高原青少年自然の家　教育事業報告

「　ふくおかきっずアドベンチャーキャンプ　」

～　第４回　フォレストキャンプ　～

１　趣　　旨　　福岡県内に住む小学校3・4年生の児童を対象に、各青少年教育施設での特色を生かし、SDGsの観点を取り入れながら自然・生活体験と「鍛ほめ福岡メソッド」を位置付けたプログラムを経験させることを通して、自尊感情や向上心、困難に立ち向かう心等を伸ばし、自律的に成長するための基礎を養う。

２　主　　催　　福岡県国公立青少年教育４施設連携協働事業実行委員会
国立夜須高原青少年自然の家　　福岡県立社会教育総合センター
福岡県立英彦山青年の家　　　福岡県立少年自然の家「玄海の家」

３　主　　管　　福岡県立少年自然の家「玄海の家」

４　期　　日　　令和５年１２月９日（土）～１２月１０日（日）【１泊２日】

５　場　　所　　国立夜須高原青少年自然の家

６　対　　象　　福岡県内に住む小学校３・４年生の児童　計２４名

７　参 加 者　　２２名（小３：１２名、小４：１０名、学生ボランティア４名）

８　日　　程　　○１２月９日（土）
開会式（Ｂｅｉｎｇ）、夜須高原の森散策、竹切り体験、昼食（レストラン弁当）、竹シェルターづくりに挑戦、野外炊飯（豚汁定食）、振り返り、竹シェルター宿泊
○１２月１０日（日）
野外炊飯（ホットドック）、修了記念制作（柵づくり）、昼食（レストラン）、振り返り、閉会式（Ｂｅｉｎｇ）

９　活動の実際

【目標設定】

【竹切り体験】

【竹シェルターづくりに挑戦！】

【野外炊飯（豚汁定食)】

【竹シェルター宿泊①】

【竹シェルター宿泊②】

【修了記念制作①】

【修了記念制作②】

【振り返り】

10　感　　想

○　新しい友達もできて、初めての体験があったのでよかったです。
○　自分が人のために何かしてあげることが好きだと分かった。
○　協力すること、役割分担することが大切だと気付いた。
○　大人になったら、ルイみたいなボランティアになりたいので、こういう事は知っておいた方がいいと思いました。
○　この前より協力することができ、見通しを立てて活動できた。
○　修了記念制作を作って班の人との絆が結ばれたと感じた。

11　成　　果

○　開会式では、事業の趣旨（目的）と活動内容について、前回（英彦山）の振り返りや、今回（夜須高原）のめあての確認を行った。その後、Ｂｅｉｎｇを用いて個人の目標設定や、１日目の最後にジャムランタンを囲みながら活動の振り返りを行った。また、２日目の振り返りでは、自分ができたことや頑張ったこと、仲間の良さを発表し合う場を設定した。参加者たちは２日間のキャンプを通して、大変意欲的に取り組むことができ、自尊感情の向上につながった。
○　「野外炊飯（豚汁定食）」では、ノンバーバルで行った。表情やしぐさが相手に与える印象について感じたり、見通しをもつことや役割分担をすることの大切さについて気付くことができた。また、グループごとでの竹シェルターづくりや宿泊体験、ふりかえりなどグループ活動を多く取り入れた。そのため、グループ活動の楽しさや難しさ、仲間と協力する良さを学ぶことができた。特に竹シェルターでは、グループで声を掛け合ったり、お互いに作業を手伝ったりする姿が見られ、自他の良さを認め合い、仲間とともに困難に立ち向かう心を伸ばし合うことができた。
○　ＩＫＲ調査（事前・事後）を実施したところ、「生きる力」の変容は２．８ポイント、「心理的社会的能力」の変容は１．９ポイント、「徳育的能力」の変容は０．１ポイント、「身体的能力」の変容は０．８ポイント向上した。従って、参加者にとって有意義な活動となったことが分かった。

12　課　　題

○　福岡県立３施設との共催事業として実施した。参加者にとって有意義且つ各施設の特色を生かした質の高い体験活動を提供するためにも、年度当初に事前・事後会議の日程などの年間計画の作成、４施設の連携・協働体制の在り方、事業の趣旨や段階的で連続性のあるプログラム内容の検討など、計画的・組織的に取り組んでいく必要がある。
○　ボランティアの固定化が見られるため、新規ボランティアの育成が必要である。来年度は、主管施設が早い段階から広報を行ったり、大学等に出向いたりして、新規ボランティアを確保したい。